フレーベル教育学の西洋精神史における位置づけについて

豊　泉　清　浩
群馬大学教育学部学校教育講座教育学教室
（2011 年 9 月 28 日受理）

Über die Orientierung in der abendländischen Geistesgeschichte der Pädagogik Fröbels

Seiko TOYOIZUMI
Department of Education, Faculty of Education, Gunma University
（Accepted on September 28th, 2011）

はじめに

フレーベル（F.W.A. Fröbel, 1782–1852）の教育学は、難解な世界観•基本思想である「球体法則（das sphärische Gesetz）」の性格から、神秘主義的傾向を有すると見られている。神秘主義は、多義的であるが、一般に神と人間との合一の体験を根拠とする思想である。フレーベル教育学は、万物の神的統一を目指し、神と人間との合一を目標とする。

本稿では、まず神秘主義とはどのような思想であるかについて考察し、とりわけドイツ神秘主義の特徴を明らかにする。それから、フレーベル教育学の神秘主義的傾向について、先行研究においてどのように論じられているかを見る。そうすると、球体法則には、新プラトン派のプロティノス（Plotinos, 205–270）の思想との関連があることを初め、さまざまな思想の影響があることが明らかになる。それでもそのような思想の影響だけでは、説明がつかず、判然としない部分が見えてくる。それは男女の性的両極性の統一という問題である。そこで、この従来の先行研究では十分に考察されていない問題について、ユング（C.G. Jung, 1875–1961）の思想の観点から考察する。

フレーベル教育学の神秘主義的傾向は、従来、新プラトン派のプロティノスの流出説とその系譜との親近性において捉えることが一般的であった。しかし、そのような説においてもそれだけでは説明し切れないフレーベル独自の思考形式があることが指摘されてきた。この点に関連して、球体法則における対立と結合の思想は、錬金術の発想に近いことはすでに指摘した(1)。それをさらに深め、本稿では、ユングが錬金術の源流と見るグノーシス主義にまで遡って考察する。それゆえ本稿の目的は、フレーベル教育学を西洋精神史に位置づける場合、従来の研究では把握し切れないフレーベル独自の思考形式は、グノーシス主義及び錬金術との親近性という観点において明瞭となることを明らかにすることにある。

1．ドイツ神秘主義の特徴

アンリ・セルーヤ（Henri Sérouya）は、神秘主義の定義に関して次のように述べている。「今日では、神秘主義という語は二とおりの意味で用いられる。広義には、理性を超絶しているように思われる何か崇高なものを漠然と暗示している。思想家たちにとっては、その中に『直接的』『直観的』な接触の感

覚、自己と自己よりはるかに偉大な、世界の魂と呼ばれるもの、すなわち絶対者との結合が現われる内面的な状態が神秘主義である。換言すれば、それは人間精神と実在の根元との内密な、直接的な結合、すなわち、神性の直接的な把握なのである」(2) と。したがって本稿では、広義の神秘主義を前提としつつも、狭義の思想家たちによる神秘主義に焦点を当てていくことになる。

さて、岸本英夫は、『宗教神秘主義』において、人間の生活活動としての生命拡充には、二つの違った方向があると指摘する。それは、生命の拡充を外に求めるか、内に見出すかの二面であり、それぞれ外向性と内向性と呼んでいる。内向性は、自己の内面における心の持ち方を変化させて、生命を拡充する方向で、「宗教神秘主義は、宗教の内向性を、極度に、あるいは、むしろ、過度に、強調するもの」(3) である。また、宗教神秘主義と超自然観は、別の性質のものであるとする。したがって、神秘体験の特異性は、十分に認めつつも、研究の立場としては、超自然観的な前提を取り入れないで、どこまでも、宗教神秘主義を、人間の営みである宗教現象の一つとして観察する(4)。

岸本は、宗教神秘主義を定義することは、極めて難しいことという前提の下で、宗教神秘主義の、構造や輪郭の特徴について次のように考えている(5)。宗教神秘主義の中には、性質の著しく異なった諸要素が存し、複合性を有する。宗教神秘主義の、根本的な基調をなすものは、神秘体験である。たとえば、キリスト教神秘主義では、神との合一等が神秘体験である。神秘体験を基礎として、神秘思想、神秘修行を特徴として考えている。

ところで、ヴェンツラッフ＝エッゲベルト（Friedrich-Wilhelm Wentzlaff-Eggebert）は、そのような神秘体験を前提とするドイツ神秘主義の特徴について論究している。したがって彼は、ドイツ神秘主義の核心、現象形態の統一性の本質的特徴は、ウニオ・ミスティカ（unio mystica）にあると考えている。彼は、ウニオ・ミスティカという言葉で、「個々の人間をその性質に応じた仕方で神との最も密接な結合へと導く、魂の内部における出来事」(6) を考えている。つまり、神秘主義という言葉で、硬直した哲学体系ないし神学体系を考えるのではなく、新プラトン主義の伝統から発展し、スコラ哲学を経て、12 世紀にドイツ特有の初期の形態となって初めて現われ、14 世紀前半に至って完全に発展を遂げた一つの有機的精神運動を考えている。ヴェンツラッフ＝エッゲベルトは、神秘主義を体系としてではなく、ドイツ思想史内で有機的に発展している一つの精神運動として見ようとしている(7)。

神と人間との分離の克服が、ウニオ・ミスティカの体験の中で行なわれる。ヴィジョンにおいて神と人間の精神との最初の合一、最初のウニオ・ミスティカが実現される(8)。ウニオ・ミスティカは、あらゆる神秘主義者の最後の聖なる目標であり、エックハルトの目標もこれであった。ヴェンツラッフ＝エッゲベルトは、エックハルトの神秘主義の立場について、「人間の魂の起源を神に求める想定、エックハルトの内在説はキリスト教的創造概念と新プラトン派の流出説との結合の上に成立している」(9) と述べている。彼は、エックハルトには、キリスト教の影響だけではなく、新プラトン派の影響が大きいことを指摘している。したがってヴェンツラッフ＝エッゲベルトによれば、「このようにウニオ・ミスティカの哲学的前提は新プラトン主義の思考過程にそって展開されている。神との合一が人間に可能であるのは、人間が内に神的本質を臓し、自らの魂に備わる同一性の本源へ帰ろうと憧れるからだ」(10)。

ヴェンツラッフ＝エッゲベルトは、特別なエックハルト的解釈におけるウニオ・ミスティカの教説とその足跡は、より明瞭に、より単純化されて、タウラーやゾイゼに認められると指摘する(11)。タウラーによってドイツ神秘主義の発展には新しい時期が始まり、そこでは神秘主義的神観から一つの神秘主義的人生観が生まれた(12)。神秘主義的な神との合一において個人に開かれている神への直接の道を辿る自由を、彼は繰り返し要求している。このようにタウラーの教は神秘主義的ウニオによって神観と人生観を統一している。ゾイゼは、神へ到る道を現世において、禁欲によるすべての己の意志活動の放棄によって、奪い取ろうとした。ゾイゼにおいては、他

のいかなる神秘主義の師僧にも見られない程、仲介者マリアの姿が前面に出て、神へ向かう人間の道に割り込んでいる[13]。

中世後期の神秘主義的著作において、影響力の大きさと思想の独立性が際立っているのが、ニコラウス・クザーヌスである。ヴェンツラッフ＝エッゲベルトは、クザーヌスを神秘主義的思索の発展の中で見ると同時に、ドイツの人文主義の発端として見なければならないと指摘し、またクザーヌスは神と人間という二元論の問題を認識論的な面から解決しようと試みたと指摘する[14]。ヴェンツラッフ＝エッゲベルトによる次のような論述には、フレーベルの球体法則における対立の法則と対立の結合の思想に類似するものを見ることができる。「クザーヌスは無限性の力から彼の『対立の一致』の偉大な教説に達する。円と多角形との数学的表象によって、彼は存在問題全体の象徴を得る」[15]。「そこでこの数学的考え方の結果を宗教の問題に振り向けるならば、円の中の点という古来の表象を利用して、神は円であり、宇宙（現象界）はその全可能性においてこの円に内接していると言うことが出来る」[16]。「神はあらゆる対立の統一であり、そこでは神の精神と人間の精神が結び合っている。それゆえ対立の一致の命題は、また神秘主義の意味で理解されるべきである」[17]。「エックハルトに比べて、ここには注目すべきことに、個性概念への進展が近代的意味で行われている。点（人間）は無限の球へ到る全展開の発端であるという命題を、クザーヌスは無限の多角形の円周への接近の命題と結びつけている。この無限の多角形は神の無限性に内接する個人の多様性の象徴と見られる」[18]。

神は円であり、あらゆる対立の統一であるという説は、球体法則における対立の統一と類似し、また点である人間が無限の球へ到る全展開の発端であるという命題は、「部分的全体（Gliedganzes）」としての人間の存在に類似している。

ヴェンツラッフ＝エッゲベルトは、新プラトン主義の影響を受けたパラケルススの自然学の宇宙観は、ヤーコプ・ベーメの自然神秘主義の最も本質的な基礎になったと指摘している[19]。また彼は、シュライエルマッハー、そしてフレーベルに大きな影響を与えたノヴァーリスやクラウゼもドイツ神秘主義の枠内において捉えている。

2．フレーベル教育学における神秘主義的傾向

フレーベル教育学における神秘主義的傾向は、球体法則の性質に見られる。球体法則は、主著『人間の教育』に見られるように、「すべてのもののなかに、神的なものが、神が、宿り、働き、かつ支配している」[20] という思想である。したがって教育は、人間に宿っている神的なものを表現することへの助成である。こうした万物の神的統一の直観は、「万有在神論（Panentheismus）」とも呼ばれる。また、球体法則から発展した「生の合一（Lebenseinigung）」という思想がある。この「生の合一」は、教育の目標を示唆する。すなわち教育は、人間を「神との合一」、「世界との合一」、「自己との合一」へと導いていかなければならない[21]。このようにフレーベル教育学は、神的なものにより、人間が神と合一することを目指す点に、神秘主義的傾向が見られる。

次に、フレーベル教育学における神秘主義的傾向について、代表的な先行研究において、どのように考察されているかを見ていくことにする。

荘司雅子は、『フレーベルの教育学』において、フレーベル教育学の根底を流れ、その基調をなしているものは、ロマン主義であり、象徴主義であると指摘している[22]。フレーベルのロマン主義には、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルというドイツ観念論哲学の影響が見られるが、特にシェリングの汎神論の影響があり、それだけではなく、クラウゼの万有在神論の影響が強い。さらにロマン派詩人のノヴァーリスの『青い花』からも多大な影響を受けたと指摘している[23]。

荘司によれば、フレーベルの教育学の特色は、人間教育の基礎が神と自然と人間との生命統一、生命合一にあることで、自己活動の原理が中心原理である。フレーベルの哲学的基礎は主著『人間の教育』に見られるが、文芸上のロマン主義を最も自由に、

大胆に駆使してできたものが『母の歌と愛撫の歌』であり、この『母の歌と愛撫の歌』こそフレーベルのロマン主義の最も美しい一個の結晶と見ることができる[24]。

荘司は、『フレーベル研究』において、フレーベルがドイツ観念論哲学、とりわけシェリングから影響を受けた点や、クラウゼの万有在神論から影響を受けた点について深く論究している。フレーベル教育思想の基礎的原理は、神、自然、人間の三位一体、つまり三者の神的統一にある。荘司は、フレーベルの神は、「キリスト教的万有在神論」[25] を基礎として考えたものであると解釈することによってのみ、真に彼の神を理解し把握することができると結論づけている。

倉岡正雄は、『フレーベル教育思想の研究』において、従来のフレーベル研究が、フレーベルをロマン主義の思想家として捉え、感情を主体として「無限」を憧れる思想家であることを前提にしている研究が多いと指摘する[26]。倉岡は、フレーベルが、感情を育むものや、「無限」という概念をどのように位置づけていたかを、合理的に思想内容を理解していく過程の中で明らかにしなければならないと考える。したがって、フレーベル教育思想のロマン主義的性格を前提にすることなく、論理的に彼の思想を追究していきたいと考えている。

倉岡は、フレーベルのキー概念を中心に展開していくので、論点が法則観に集約されてくると断っている[27]。倉岡は、フレーベルの生育歴に注目しつつ、彼の教育思想は「自然哲学」と「キリスト教の宗教」とによって基礎づけられてきたとする。フレーベルは、ロマン主義に位置づけられるが、ロマン主義の教育学は常に自己の根源に還帰する行為としての教育作用に注目するので、教育の本質はそのような「自己教育」に集約されてくる。倉岡は、フレーベルにとって「合理的なもの」を「非合理的なもの」へと架橋し得る最大の「象徴」となったのが「球体法則」（Sphärische Gesetz）観であったと指摘する[28]。

倉岡は、フレーベルは自己の宗教的な信念とゲーテ的な科学思想との架橋に専念し、その成果が「球体法則」を経て万有を支配する法則観としての「神性論」に実ったと考えている。倉岡は、フレーベルの教育思想は、「自然哲学」を基礎としつつ「人間哲学」へと展開したとの前提に立ち、ドイツ観念論を中心に、プラトンやプロティノスなどを含む実にさまざまな影響を受けているが、論理的展開の形式はシェリングに最も近い立場にあると指摘する。しかし倉岡は、「無論このことは論理形式からいえるのであり、その内容に関しては、『衝動』が『心情』の働きによって論理の根底にある非合理的な神秘性を求めつづけなければならないので、彼は多くの思想家たちとはやはり性格を異にしたタイプの思想家であるといえる」[29] と述べている。

岸信行は、論文「フレーベルにおける神の概念」において、フレーベルの宇宙観・人生観は、すべて「神と合一すること」に基礎を持っていると指摘する。岸は、「フレーベルが意味する神の概念は、従って、単なる自然哲学における汎神論的な神のみを意味するものではなく、総ての自然に内在していると同時に、それらを超越して存在する、万物の支配者としての超越的な神をも意味しているのである」[30] と述べている。荘司雅子が指摘するように、フレーベルにおける神の概念は、「キリスト教的万有在神論」の立場を基礎としている[31]。フレーベルの万有在神論に直接影響を与えたと考えられるのは、クラウゼである。クラウゼは、万物は神の中に、神と共にまた神によって生存すると考えた。

岸は、フレーベルにおける神の概念は、プロティノスの哲学の影響があると指摘する。プロティノスは、神が一切であるとし、一切は神の内に含まれているという一元論を唱えた。この一元論には、絶対的に完全な神から、なぜに価値低き物質が生じてきたかという問題が生じて来た。この問題に答えたのが、流出説である。「この説によれば、神は完全であり、その力が充ち溢れ、神の意志によってではなく、必然的に世界が神から流出して来る。すなわち、神（一者）が万象に顕現するのである」[32]。プロティノスによれば、神から生じて来たすべてのものは、その根源を神に有しているがゆえに、その一者としての神に戻ろうと欲する。フレーベル教育学の中心的テーマである「神的統一」の思想は、このようなプ

ロティノス的な一者に帰ろうとするテオリア、すなわち神への上昇と解釈することができる。「神的統一」とは、フレーベル教育学の目標である「生の合一」を意味している。岸は、「プロティノスにあっては、世界の生成は、神自身の純粋直感的思考活動によっており、神に対立する別の世界というものは全く存在しない。世界は本質的に神なのであって、神の性としての善なのである。この点、フレーベルの神の概念と一致する」(33) と述べている。

甲斐規雄は、論文「F．フレーベルと神秘主義」において、神秘主義の概念、ドイツ神秘主義と宗教との関係についての考察を踏まえ、フレーベルと神秘主義との関係について、神との合一という観点から論じ、プロティノスやクラウゼとの関係を視野に入れている(34)。また甲斐は、論文「フレーベルにおけるプロティノス的なもの」において、フレーベルの生の合一の思想について、「これは、プロティノスの一者からの発出、流出、溢出、そして一者への還帰、憧憬、帰一、一者と知性、知性と魂、魂と感覚的世界との還帰的関係の宇宙観、終局の姿ではないだろうか」(35) と述べている。

山口文子は、『F．フレーベルにおける遊戯思想の成立と展開に関する研究』において、球体法則の思想的系譜について、「完全無欠の『一者』を措定し、万物をその流出・放射と見て、それへの合一を説く発想は、古くプロティノス的、新プラトン主義的なものと言えよう」(36) と述べている。そして山口は、フレーベルにおけるペスタロッチーの思想の受容という観点から、次のように述べている。「『球体法則』に見るフレーベルのペスタロッチ受容・批判には、思想史上、次のような位置づけを与えることができよう。すなわち、ペスタロッチは、主体と客体が分かれて、主体の方から、知識〈知ること〉の可能性や方法を探る主客二元論に立つ啓蒙の認識論の枠内、言わばカント的枠内に留まりながら、『直観』概念などそれを越え出る可能性も開くような位置にいた。それに対してフレーベルは、自らの『統一性』『多様性』『個別性』という志向を基に、存在論の深化によるカントの克服をめざしたフィヒテや特にシェリングらの枠組みを部分的に援用し、遡って新プラトン主義・神秘主義思想をも踏まえ、それらをフレーベルなりに、独自の様式で組み合わせて、『球体法則』を教育思想の基盤に据えた。そうすることによって、ペスタロッチにあっては潜在的なものに留まっていた『高次の統一性』を展開させようとした、と理解できよう」(37)。

山口も、フレーベルの球体法則に、新プラトン主義とその流れの神秘主義の影響を認める。山口は、1820年代前半に、「球体法則」から「三位一体法則」への思想進展が見られると指摘する(38)。

小笠原道雄は、哲学史の系譜を辿れば、球体法則は次のような流れにあると指摘している(39)。まず新プラトン主義としてのプロティノスによる根源―一者、流出、多様性、段階的存在の概念である。プロティノスによれば、神的なものとは、根源―一者であり善であり、そこから、神的なものの「流出」によって世界の多様性が生じ、しかも、神的なものは、高いものから低いものまで、段階的に物質的な実体と結びついている。ルネサンスにはいると、流出概念の継承としての近代の汎神論、とりわけ、ヤーコブ・ベーメの汎神論的世界観、スピノザから本質的な刺激を受けたドイツ古典哲学とロマン主義の時代の自然哲学の流れにある。ただ小笠原によれば、「このような哲学史の系譜から見ると、フレーベルは、哲学的思惟の主潮流から切れており、ボルト／アイヒラーによれば、唯物論と観念論との対立に努力していた人物ということになる」(40)。確かにフレーベルは、フィヒテ、シェリング、あるいはカントから影響を受けているが、それらの思想家と異なる独自の思想を持っていた。小笠原は、「従って、フレーベルは、一面性を避け、対立を調停できる思想(哲学)家に自分を算入している。そのための前提、つまり統一性における多様性の把握や、存在と同時に生成を把握するための前提を、フレーベルは、『球体法則』において見出した、と信じた」(41) と述べている。つまり、小笠原も指摘するように、明らかにフレーベルは、球体法則の究極的な目的に、対立物の結合、とりわけ諸対立の決定的な基本形式である男女の性的両極性の結合を見出していたと考えられる(42)。

さて、シュプランガー（E. Spranger, 1882–1963）

は、フレーベルの思想を新プラトン主義との関連において捉えている。彼はいう。「フレーベルの哲学は、従って、古代以来新プラトン主義的、万有内在神論的世界観のタイプに連なるものといえよう。さらに細かく規定すれば、それは神秘主義的な根本態度に属するものである。しかし中世の神秘主義者が unio mystica、すなわち彼岸での、本来言葉にはなしえないような状況での神との合一に達するのに対し、フレーベルが求めたのは、自然を貫く道を通してこのような『生命の合一』を遂げることであった」(43) と。シュプランガーは、フレーベルは神との合一を、より広い生の合一において実現しようとすると指摘している。

ボルノー（O.F. Bollnow, 1903–1991）は、フレーベルの思想をロマン主義の潮流の中に捉えるが、ロマン主義の立場に留まらず、むしろ「キリスト教的神秘主義」により近く配列されるべきであるといわれることも指摘している(44)。ボルノーは、「後期のフレーベルにおいてますます支配的になってくる根本概念は、「生の合一」（Lebenseinigung）であるが、宗教はすべての制約された関係を乗り越える全体的、究極的な生の合一なのである」(45) と述べている。

ハイラント（H. Heiland, 1937–）は、球体法則に基づく教育理論について考察する際、次のように述べている。「この教育理論的諸連関は、球体の法則性から直接演繹される。自然における、あらゆる生物における、そしてあらゆる人間における神の流出は、人間の内に球体が集約された形で存在しているということ、またそれを発展させることの重要性を意味する」(46)と。ハイラントは、球体法則において自然や人間に神的なものが宿ることについて、新プラトン派の流出説を根拠に説明していると考えられる。

このように、先行研究では、フレーベルの思想に新プラトン主義を初め、フィヒテ、シェリング、ゲーテ、ノヴァーリス、クラウゼ等の影響があることを指摘するとともに、それらの影響からだけでは説明し切れないフレーベル独自の思考形式があることも示唆している。

3．フレーベルの球体法則とグノーシス主義及び錬金術

ユングの説によれば、錬金術の源流はグノーシス主義に求められる(47)。しかし、グノーシス主義とは何かについては、簡単に述べられない難しい問題である。

グノーシス主義は、かつて 2 世紀を中心に、1 世紀から 3 世紀にかけて、キリスト教の内部における最大の異端の立場であると見られていた。それは、キリスト教の教父によるグノーシス主義に対する反駁文の資料を根拠とする研究に基づいていた。しかし、1945 年以後、エジプトのナグ・ハマディにおいて、コプト語によるグノーシス文書が大量に発見され、その後出版されたことにより、研究が急速に進展した。それにより、グノーシス主義は、原始キリスト教と相互に影響し合っていた別の宗教であることがわかってきている(48)。ここでいう原始キリスト教とは、正統な教義が成立する以前のキリスト教を指す。グノーシス主義は、4 世紀頃キリスト教の正統な教義が成立した後、キリスト教から激しく論駁され、急速に衰退していった。ユングは、西洋精神史において、表面流にあったキリスト教に対して、グノーシス主義は、底層流に潜み、やがて錬金術に流れ込んだと指摘している(49)。

さて、ユングによるグノーシス主義及び錬金術についての理解の仕方を手がかりとして、グノーシス主義及び錬金術と球体法則との関連について探っていく。その際、原始キリスト教における「善の欠如」の教義、三位一体論、球というシンボルの三点について考察する。

ユングは、原始キリスト教における「悪とは善の欠如である」という教義に対して疑問を抱いている。彼は、「悪」がないのに「善」を語れようかという立場にある(50)。この「善の欠如」という教義に対して、グノーシス主義は悪を認める立場であった。ユングは、「古代において、グノーシス派の人々の論証は、心的体験を通してすでに著しく影響を及ぼしていたが、彼らは教父たちより広範囲に亘って悪の問題と対決していた」(51) と述べている。

このことに関連して、柴田有は、古代宇宙論の観点から、グノーシス主義及びキリスト教について論究している[52]。その際、グノーシス主義者は、古代宇宙論を拒否し、とりわけ神（叡知界）と月下界との間の星辰界を悪魔視し、造物主の創造行為自体の否定にさえ至ると指摘している。これに対して、キリスト教教父は、古代宇宙論を継承する道を選んだと考えている。つまり、グノーシス主義は、悪を認め、原始キリスト教は、悪を認めなかったということである。

実際に、グノーシス主義の神話では、悪神であるデミウルゴスが、世界や人間を創造したことになっている。ユングは、「グノーシス派の人々が、悪の問題を徹底的に扱っていたことは、教父たちによる悪の断固とした絶滅とは最も目立った仕方において著しい対照をなしており、この問題がおそらくすでに3世紀の初めに注目を集めていたことを示している」[53] と述べている。悪を否定しなかったグノーシス主義の立場に、ユングは注目している。彼は、グノーシス主義は自己を表わす適切な象徴表現を見つけようとする実り豊かな試みを行なっていたと指摘する。彼は、「グノーシス派の人々は、錬金術師たちと同じように、福音による影響のより広い進展から生じるすべてのこれらのシンボルに対して、真実の宝庫を示す。しかし同時に、グノーシス派の人々の見解は、善の欠如の教説によって規定された神の非対称に対する補償をも意味する」[54] と述べている。つまりユングは、グノーシス主義における悪を認める立場は、原始キリスト教の教義を補完する要素を持っていたと考えるのである。

球体法則は、対立の法則であるから、「悪とは善の欠如である」という考え方を取らない。つまり善と悪の対立がある。フレーベルは、「人間の本質は、それ自体において善であり、人間のなかには、なるほどそれ自身において善い性質や傾向が存在する」[55] と考えている。つまり人間は神に創造されたものであるから、決して悪いものではないと確信している。しかしフレーベルは、人間が神によって創造されたことを否定し、神に背く場合、あらゆる悪の唯一の源泉である虚偽を生み出すと指摘する[56]。彼によれば、「もし、それ自体において悪いと言われうるような悪が存在するとすれば、それは、この虚偽である。なぜなら、これこそ、最初の悪であるから」[57]。しかしフレーベルは、虚偽はそれ自体において存立するものではなく、人間は、虚偽のために創られたものでもないと考える。そして彼は次のように述べている。「また人間は、虚偽を、自己自身から、自己の本質から、作りだすのではなく、人間が、神によって、真理のために創られているからこそ、人間は、虚偽を作りだすことができるのであるし、また作りだすのである。このことを自ら認めないか、あるいは他人に対して認めさせないかのいずれかによって、人間は虚偽を作りだすのである。このことを、自己自身のなかで、また自己自身を通して、自己の本質の純粋な源泉から認識したり、また他人にも承認させたりすることを妨げることによって、人間は虚偽を作りだすのである」[58] と。フレーベルは、人間は神によって真理のために創られているから、真理への過程において虚偽を作り出してしまうが、このことを認めないことによって、人間は、悪である虚偽を作り出してしまうと考える。だから彼はいう。「それゆえ、人間のなかに現われているあらゆる欠陥の根底には、おし潰されるか、おし除けられるかはしているが、善い性質や善い傾向が、本来的にかつ根源的に、存在しているのであって、ただそれが、抑制されているか、誤解されているか、あるいは誤った方向や曲った方向に導かれているかだけなのである。それゆえ、あらゆる欠陥を、いや邪悪や下劣さえをも、破壊し、破棄することのできる唯一つの、しかも決して欺くことのない方法は、人間の本質が持っている根源的に善い源泉や善い側面――これをおし潰したり、妨害したり、あるいは導き誤ったりすることから、欠陥が生じてくるのである――を、まず探し、それを発見し、次に、それを養い、育くみ、まっすぐに立たせ、正しく導く努力を重ねるという点にある」[59] と。彼は、人間には邪悪さや下劣さもあるが、神によって真理のために創造されたことを自覚することによって、あらゆる悪を破壊し、善を育み、正しく導く努力が大切であると考えている。つまりフレーベルは悪を否定しないが、人間の

本性は善であると捉えるのである。

また、ユングは、キリスト教の三位一体論には偏りがあり、グノーシス主義には、この三位一体論を補う要素があると考える。キリスト教では、325年のニケーア公会議において、三位一体論を正式な教義として決定した[60]。三位一体とは、神(父)、イエス(子)、聖霊を一体の神であると規定する教義である。この三位一体論は、男性性・父性に偏っているので、女性性・母性が排除されている。ユングは、この三位一体に、母元型の典型であるマリアを入れることによって、四要素一組の構造となり、この図式が安定すると考える[61]。グノーシス主義における女神であるソフィアが、キリスト教において神性を与えられたマリアに対応すると見られている。

ユングは、男性性・父性に偏っているキリスト教に対して、グノーシス主義から錬金術へと流れ込んだ底層流は、女性性・母性をも包含する対立物の結合の思想であると考えている。その際、対立の究極的なものは、常に男性と女性の対立である。ユングは、「その対立は、両性の対立である。したがってアニムスとアニマは究極の対立の対を表現している。この対は、望みを失い論理的矛盾によって分離しているのではなく、この対立に特有な相互の引きつけ合いによって、結合を約束するだけでなく、可能にもしている」[62] と述べている。このような対立物の結合は、錬金術では「賢者の石」などと呼ばれ、後述するように個性化過程で実現を目指す自己を意味する。ユングは、「錬金術の対立の結合から出てくる二重の存在、すなわちレビスあるいはラピス・フィロソフォルムは、当該文献においてとてもはっきり示されているので、そこに自己のシンボルを容易に認識することができる。心理学的には、究極的なものは、意識(男性性)と無意識(女性性)の統合である。それは、心的全体性を表わす」[63] と述べている。

球体法則は、神、イエス、聖霊の三位一体に対して、家族関係に基づき、父、母、子の三位一体を宗教的関係として示唆する立場を取っている[64]。フレーベルは、ユングのように四要素一組については明確に言及していないが、球体法則は、母すなわちマリアを入れた三位一体を主張していると見ることができる。この点においても、球体法則は、グノーシス主義及び錬金術の流れに近い発想を持っている。

ところで、ユングは、人生後半に心の中の諸対立を統合する自己形成の働きを「個性化(Individuation)」と名づけ、この「個性化過程」の到達点を「自己(Selbst)」という言葉で表わす。ユングによれば、錬金術で目標とする最終物質は、「ラピス」と呼ばれる石である。彼は、「つまり石の中における対立の結合は、達人自身が一つのものになった場合にだけ可能である。石の統一体は、個性化、すなわち人間が一つのものになることに対応する。われわれは、石は統一された自己の投影であるというべきであろう」[65] と述べている。錬金術で目指す最終物質、あるいは錬金術書に出てくる、蛇が自らの口で自らの尾をかんでいる円環、すなわちウロボロス、そして、球体や円のシンボルは、心の中の諸対立を統合した自己を表わしている。したがって、球というシンボルは、ユングの分析心理学の観点から見ると、ウロボロスを表現し、自己を意味する。

ユングは、錬金術における石(ラピス)とグノーシス主義における原人間との関連について次のように述べている。「錬金術における賢者たちの石の『千の名前 mille nomina』は、グノーシス主義が人間(Anthropos 原人間)に対して与えたさまざまなる名称に照応する。このことから、原人間とはどんな意味なのか、難なく明らかとなる。つまりそれは、より大きな、より広範囲な人間のことである。意識領域の心の営みと無意識界の心の営みとの総和から成り立つところの、なかなか簡単には言い表わしがたい全体性のことである。主観的な自我とは逆の客観的なこの全体性のことを私は自己と名づけたわけで、つまりこれは原人間という観念にまさにぴたりと照応する」[66] と。自己は、無意識が生み出すものの中に先験的に姿を現わすが、自己の全体性を表現するために、円のシンボルや四者構成のシンボルが使われる。ユングは、「原人間は、決まって両性具有である」[67] と述べている。錬金術の最終物質である石は、グノーシス主義の原人間と同じく、対立物の

結合を表現しているということである。

このようにユングの解釈によれば、グノーシス主義における原人間、錬金術の最終物質である石は、自己を意味し、その自己の全体性を表現するシンボルが球である。したがって球体法則は、個性化過程を示唆し、球体は、自己を表現していると見ることもできよう。

む す び

フレーベル教育学は、神と人間との合一を目標とする点において、ウニオ・ミスティカの体験を根拠とする神秘主義の流れにあると見ることができる。フレーベル教育学の根底にある球体法則には、新プラトン派の流出説、フィヒテ、シェリング、ゲーテ、ノヴァーリス、クラウゼ等の影響が見られるが、そこにはそれらの思想に見られるものだけではなく、フレーベル独自の思考形式がある。そのフレーベル独自の思考形式は、球体法則における対立と結合であり、特にそこに見られる男女の性的両極性の結合である。

ユングによれば、グノーシス主義は、「悪とは善の欠如である」という考え方を取らない。つまり、善と悪の対立がある。また、ユングは、西洋精神史の表面流にあった正当なキリスト教の教義は、男性性・父性に偏っているのに対して、グノーシス主義から錬金術へと流れ込んだ底層流は、女性性・母性をも包含する対立物の結合の思想であったと考える。さらに、ユングの分析心理学の観点から見れば、球は個性化過程の到達点である自己を表わす。

こうして、従来フレーベル教育学の神秘主義的傾向は、新プラトン主義の流れを汲み、神と人間との合一を目指す思想の系譜と見るのが一般的であった。しかしそのような見方においても判然としないフレーベル独自の思考形式は、ユングの思想の観点から見ることにより、グノーシス主義及び錬金術の発想に近いと考えられる。それゆえ、フレーベル教育学の西洋精神史における位置づけにおいては、新プラトン主義の潮流として捉えるだけではなく、対立物の結合の思想を内包する錬金術の系譜において捉えることによって、フレーベル独自の思考形式が明瞭になるということができよう。

注

（1） 豊泉清浩「フレーベル教育学の研究方法としてのユング心理学について」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第 58 巻、2009 年、109–118 頁、参照。

（2） アンリ・セルーヤ、深谷哲訳『神秘主義』白水社、1975 年、10–11 頁。

（3） 岸本英夫『宗教神秘主義』大明堂、1961 年、27 頁。

（4） 同上書、32 頁。

（5） 同上書、34-75 頁、参照。

（6） Friedrich-Wilhelm Wentzlaff-Eggebert, Deutsche Mystik zwischen Mittelalter und Neuzeit, Einheit und Wandlung ihrer Erscheinungsformen, 3. Aufl. Walter de Gruyter & Co. Berlin 1969, S.7. ヴェンツラッフ＝エッゲベルト、横山滋訳『ドイツ神秘主義』国文社、1979 年、15 頁。

（7） Vgl. ibid., S.11. 同上訳書、20 頁、参照。

（8） ibid., S.22. 同上訳書、32 頁。

（9） ibid., S.90. 同上訳書、113 頁。

（10） ibid., S.90–91. 同上訳書、113 頁。

（11） Vgl. ibid., S.101. 同上訳書、126 頁、参照。

（12） ibid., S.102. 同上訳書、127 頁。

（13） ibid., S.120. 同上訳書、149–150 頁。

（14） Vgl. ibid., S.150–155. 同上訳書、184–189 頁、参照。

（15） ibid., S.154. 同上訳書、189 頁。

（16） ibid., S.154. 同上訳書、189 頁。

（17） ibid., S.154–155. 同上訳書、189 頁。

（18） ibid., S.155. 同上訳書、190 頁。

（19） Vgl.ibid., S.172. 同上訳書、210 頁、参照。

（20） F. Fröbel, Ausgewählte Schriften. Bd. 2. Die Menschenerziehung, Hrsg. v.E. Hoffmann. (Pädagogische Texte, Hrsg. v.W. Flitner), Stuttgart : Klett–Cotta, 4. Aufl. 1982, S.7. フレーベル、荒井武訳『人間の教育（上）』岩波書店、1964 年、12 頁。

（21） Vgl. F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg. v.W. Lange, Abt. 1, Bd. 1, 1862, 1966, S.15. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第一巻（教育の弁明）玉川大学出版部、1977 年、35 頁、参照。

（22） 荘司雅子『フレーベルの教育学』玉川大学出版部、1984 年、9 頁。

（23） 同上書、11–15 頁。

（24） 同上書、14 頁。

（25） 荘司雅子『フレーベル研究』玉川大学出版部、1984 年、73 頁。

(26) 倉岡正雄『フレーベル教育思想の研究』風間書房、1999年、iii頁。
(27) 同上書、iv頁。
(28) 同上書、viii頁。
(29) 同上書、223頁。
(30) 岸信行「フレーベルにおける神の概念――神の在り方と自然」、『教育哲学研究』第42号、教育哲学会、1980年、22頁。
(31) 同上書、25頁。
(32) 同上書、31頁。
(33) 同上書、33頁。
(34) 甲斐規雄「F. フレーベルと神秘主義」、『教育の真理と探究』（児玉三夫先生喜寿記念論文集）明星大学出版部、1993年、97-118頁。
(35) 甲斐規雄「フレーベルにおけるプロティノス的なもの――プロティノスの発出・還帰を手掛かりに」、『教育学研究紀要』第10号、明星大学、1995年、41頁。
(36) 山口文子 『F. フレーベルにおける遊戯思想の成立と展開に関する研究――教育思想的及び音楽教育的考察』岩崎学術出版社、2009年、63頁。
(37) 同上書、63頁。
(38) 同上書、65-76頁、参照。
(39) 小笠原道雄「フレーベルにおける人間形成の基底論理―『球体法則はあらゆる真のかつ十分な人間教育の基本法則である』―」、森田孝・長井和雄・西村皓・小笠原道雄・平野正久編『人間形成の哲学』大阪書籍、1992年、310頁、参照。
(40) 同上書、310-311頁。
(41) 同上書、311頁。
(42) 同上書、314頁、参照。
(43) E. Spranger, Aus Fröbels Gedankenwelt, 2. Aufl., Quelle & Meyer. Heidelberg, 1953, S.44. シュプランガー、小笠原道雄・鳥光美緒子訳『フレーベルの思想界より』玉川大学出版部、1983年、82頁。
(44) O.F. Bollnow, Die Pädagogik der deutschen Romantik. Von Arndt bis Fröbel, W. Kohlhammer Verlag Stuttgart 1952, S.15. O.F. ボルノウ、岡本英明訳『フレーベルの教育学――ドイツ・ロマン派教育の華』理想社、1973年、24頁。
(45) ibid., S.157. 同上訳書、106頁。
(46) H. Heiland, Friedrich Fröbel in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1982, S.63. H. ハイラント、小笠原道雄・藤川信夫訳『フレーベル入門』玉川大学出版部、1991年、103頁。
(47) ユングにおけるグノーシス主義及び錬金術の研究を基盤にした論考の代表的なものには、次のものがある。
湯浅泰雄「ユングとキリスト教」(1978)、『湯浅泰雄全集第三巻 西洋精神史（Ⅰ）』白亜書房、2002年。
湯浅泰雄「ユングとヨーロッパ精神」(1979)、『湯浅泰雄全集第四巻 西洋精神史（Ⅱ）』白亜書房、2003年。
一方、ロマン主義的な捉え方、すなわちユング的な視点からグノーシス主義を含むキリスト教史について論じた湯浅泰雄の研究や、さらにユングのグノーシス主義の研究そのものも否定的に捉える論考がある。（大田俊寛『グノーシス主義の思想――〈父〉というフィクション』春秋社、2009年、16-26頁、参照。）
(48) 前掲、湯浅泰雄「ユングとキリスト教」、233-290頁、参照。
(49) Vgl. C.G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd. 2, Aion. Beiträge zur Symbolik des Selbst, Hrsg. v.L. J.-Merker, E. Rüf, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S.186, S.248. C.G. ユング／M-L. フォン・フランツ、野田倬訳『アイオーン』人文書院、1990年、194頁、260頁、参照。
(50) Vgl. ibid., S.71. 同上訳書、81頁、参照。
(51) ibid., S.51.
(52) 柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房、1982年、参照。
(53) C.G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd. 2, a. a. O., S.118.
(54) ibid., S.284.
(55) Vgl. F. Fröbel, Die Menschenerziehung, a. a. O., S.72. 前掲訳書『人間の教育（上）』、157頁、参照。
(56) Vgl. ibid., S.72. 同上訳書、158-159頁、参照。
(57) ibid., S.72. 同上訳書、159頁。
(58) ibid., S.72. 同上訳書、159頁。
(59) ibid., S.73. 同上訳書、160頁。
(60) 前掲、湯浅泰雄「ユングとキリスト教」、291-341頁、参照。
(61) Vgl. C.G. Jung, Gesammelte Werke, 14. Bd.1, Mysterium Coniunctionis, Hrsg. v.L. J.-Merker, E. Rüf, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S.216-217. C.G. ユング、池田紘一訳『結合の神秘Ⅰ』人文書院、1995年、237頁、参照。
(62) C.G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd. 2, a. a. O., S.283.
(63) ibid., S.283.
(64) F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg. v. W. Lange, Abt. 1, Bd. 2, 1863, 1966, S.509. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三巻（教育論文集）玉川大学出版部、1977年、539頁。
(65) C.G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd. 2, a. a. O., S.183.
(66) ibid., S.203. 前掲訳書『アイオーン』、213頁。
(67) ibid., S.218.